九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

地域在住高齢者の心理的well-beingを目指した臨床心理学的支援に関する研究

久，桃子

https://doi.org/10.15017/1654613

出版情報：九州大学，2015，博士（心理学），課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

（様式３）

氏　　名　：久　桃子

論 文 名　：地域在住高齢者の心理的 well-being を目指した臨床心理学的支援に関する研究

区　　分　：　甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文では，老いに伴う機能の低下や喪失は経験しながらも，高齢者がいきいきとよりよく生きるための心理的機能に着目し，その支援について支援事例を通して臨床心理学の立場から検討することを目的とした。

第 1 章では，地域在住高齢者の地域支援についての先行研究において機能改善の側面ばかりが強調されていることを指摘し，衰退していく機能や縮小していく役割がありながらも高齢者がよりよく生きるための肯定的な心理的機能に着目する必要があることを示した。そこで，本論文では高齢者が充実した高齢期を過ごすためのポジティブな心理的機能として，心理的 well-being を支援の視点として設定し，先行研究の知見から，「肯定的な対人関係」と「自己受容」の二つの側面から高齢者の心理的 well-being を捉え支援を展開していくことが有効である可能性を述べた。また，これまで地域在住高齢者への臨床心理学的アプローチは回想法が用いられることがほとんどであるため，他のアプローチ，特に動作や行為などの非言語的媒介を活用したアプローチの方向性についての検討を目的とする。さらに，支援事例から高齢者の心理的過程や相互交流の在り方について質的に捉え，臨床心理学的アプローチを用いた心理的 well-being の支援における展開方法や工夫，意義について探索的に検討することを目的とした。

第 2 章では，本研究での活動の基盤となっている，Y 町の生きがい支援事業である「ふれあいスクール」事業に，臨床心理学的視点に立った支援を導入，展開した過程を事例にまとめ，地域在住高齢者の健康支援において，臨床心理学的支援が導入される上での工夫と課題について検討することを目的とした。事例から，「ふれあいスクール」事業を基盤に，臨床心理学的アプローチの実施は，高齢者のつながりの形成や生活のはりあいを促進していく意義があることが示された。また，地域における実際の活動のなかで，健康な高齢者を対象としながらも認知機能の低下が見られる者が一定数存在し，軽度の認知障害がみられる者も，地域の一員として周囲との関係を育んでいくという視点が重要であることが示唆された。

第 3 章では，回想法を実施した事例についてその意義と展開のあり方についての検討を行った。事例から，昔の話を共有する中で受容共感的な対人関係の深まりがみられた。グループ回想法によって促された対人関係の側面として「同じ地域に生きる同世代の仲間とのつながり」，「若い世代とのつながり」，「思い出の中での他者とのつながり」の 3 側面がみられた。また，過去の自分の振り返りが，高齢者の現在の自己価値の再確認へとつながることが意義としてあげられた。地域で共有される体験や記憶を共に語り，自分の生きてきた過程をメンバーと共に振り返る中で，地域に安心できる居場所が形成されることが，地域での回想法の大きな特徴としてみられた。一方で，昔の話を振り返ることに抵抗を示す参加者，認知機能の低下等により会話でのやり取りが困難である者が

存在し，そのような参加者に合わせた支援の検討が課題としてあげられた。

第 4 章では第 3 章での課題をふまえ，昔の話の共有のみではない参加者のつながりの形成と，言語表現以外の表現を用いて相互交流を活性化させることを目的として心理劇を導入し，その意義と展開のあり方について検討した。事例では，劇化を通して思い出の中の出来事をメンバーと「今，ここで」共に体験することにより，メンバー間の一体感や共感が促されることが示された。また，認知機能の低下による対人交流の困難さがみられた参加者に対して，役割演技を通して自発的な表現を促すことで，日常的な「配慮する人」と「配慮される人」という周囲との固定化された役割関係が変化し，より相互的なコミュニケーションへとつながることが考えられた。また，役割演技を通して,「もう何もできない」という自己イメージを有している高齢者にとって日常とは異なる自己役割の体験の機会となることが示唆された。

第 5 章では「健康を維持したい」,「健康である自分の確かめたい」という参加者のニーズに対して，動作法によるアプローチを用い，高齢者の身体に対する実感的体験と能動的関与に焦点を当てた支援の意義とあり方について検討を行った。ペアリラクセイションの導入により，援助者役割と被援助者役割の明確化と役割交換という関わり合いのなかで，互いをいたわりあう体験となることが,「肯定的な対人関係」の促進することが示された。また，より具体的・実感的な身体の感じに注意を向けること，さらに主体的に自分の身体をコントロールする体験を通して，参加者が日常生活の中でも自分の身体をより大切にいたわり，主体的に生活してくことへとつながることが動作法の意義として示唆された。

以上の結果から，第 6 章では 3 つの臨床心理学的アプローチの差異と共通性について比較し，地域における参加者の特徴やニーズに合わせた配慮や課題についての考察を行った。また，事例を通して得られた知見から，地域在住高齢者の心理的 well-being に関して考察し，臨床心理学的支援が地域における高齢者支援において果たす意義を論じた。